

市では、現在新たなまちづくりの指針となる新総合計画の策定を進めています。計画を審議する総合計画審議会の委員の皆さんに、これからのまちづくりに期待することなどを伺います。



石巻専修大学
経営学部経営学科 教授
庄子 真岐 さん

プロフィール

仙台市在住。専門・研究分野は観光学、観光マーケティング、観光まちづくり。産学官民との連携を図りながら、地域活性化やSDGs(持続可能な開発目標)の推進などに携わる

Q まちづくりにつながる観光とは？

A 私が専門としている「観光学」は、地域活性化の手段として観光を位置付けています。近年は全国的にサステイナブル

ツーリズム(持続可能な観光)が推進されてきましたが、この1年ほどで「よりよい観光」が求められるようになってきました。経済的な効果だけでなく、観光客が来ることによってイベントが盛り上がりたり、地域の課題が解決されたりするなど、まちの発展につながる観光が期待されています。

まずは何より、まちの価値を高めてこそ、観光客は訪れます。仙台に住む人たちが育むまちの魅力や目指す都市の姿は、そのまま観光にも生かされると考えています。

Q 国内外から仙台・東北へ人を呼び込むためには？

A 仙台は、カメラオンの魅力を持つまちだと感じています。都市型の観光を展開できる一方、豊かな自然や温泉地もあり、アウトドア体験を提供することも可能です。例えば午前中は都心でショッピング、午後は郊外の温泉やキャンプ場へ。さらに歴史上の人物の中でも人気が高い伊達政宗公ゆかりのスポットなど、歴史遺産も有しています。また百万都市でありながら、市民協働で創り上げてきたジャズフェスや秋の風物詩の芋煮会など、市民の「顔」や生活文化の「匂い」を身近に感じることができるイベントが多いのも魅力です。こうした多彩な組み合わせを楽しめるのは、仙台の大きな強みです。観光に一発逆転の秘策はありません。今後、コンテンツの「探索」と二つ二つの「コンテンツ



仙台市では、歴史・文化や自然、食など、多彩な資源を活用した体験プログラムを楽しめます

仙台市における外国人住民

令和2年4月の仙台市における外国人住民数は、人口の1.3パーセントの13,817人と過去最多で、東日本大震災後に落ち込んだ平成25年の約1.5倍となっています。この増加は、留学生の急増によるもので、多くの大学や短大、専門学校を擁する「学都・仙台」の特徴でもあります。国籍・地域別では、中国が最も多く、次いでベトナム、韓国、ネパールの順となっており、特に震災後はベトナムやネパールからの留学生が増加しています。

地域や学校、職場において、外国人住民と接する機会は多くなっています。本市においても昨年度の仙台多文化共生センターの開設や小・中学校への指導協力者の派遣など、外国人にとって住みやすいまちづくりを進めています。



多文化共生センターでは外国人住民の生活相談などに応じています

を磨き上げる「探究」を、両輪で進めていく必要があります。その際に、観光事業者と異業種との連携が増えていけば、仙台のブランド力はより向上するでしょう。

また仙台は、東北をけん引する役割を担っています。仙台が東北全体の魅力を高めるお手伝いをすることで、共存共栄を図ることができます。そうなれば仙台を拠点にその先の地域へと、観光の楽しみや可能性が拡大。インバウンドの増加にもつながると思います。

Q 総合計画審議会を振り返って思うことは？

A 仙台市以外の地域で会議に参加すると、女性は私人という場合も少なくありません。

ん。それに対して仙台市の総合計画審議会の委員は、男女がほぼ同数です。政府が推進する女性活躍という観点も、まちの魅力として発信していくべきだと思います。

こうして審議を重ねた新基本計画が、4月にスタートします。ぜひ市民の皆さんにも仙台市が目指す姿を共有していただき、アクションを起こしてもらえたらうれしいです。まちづくりの議論の中でよく言われるのが、「1人の専門家より、100人のプレイヤー」。実際に汗をかいて動く人が何人いるかで、まちの魅力は決まります。どんなに小さいことでも構いませんので、多くの方が何かに取り組んでみるきっかけになればと願っています。